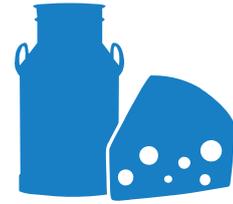


# 牛乳・乳製品



## ◆飼養動向

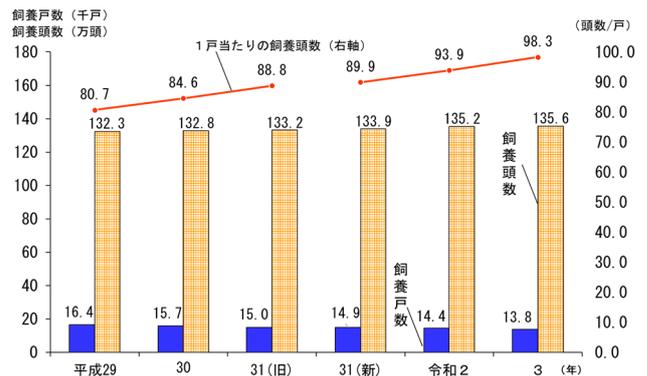
### 3年2月現在の乳用牛飼養頭数、前年比0.3%増

乳用牛の飼養戸数は、酪農家の高齢化や後継者不足などにより離農が進んでいることから、令和3年では、前年を600戸下回る1万3800戸（前年比4.2%減）とやや減少した（図1）。

こうした中で飼養頭数は、性判別精液の活用などによる後継牛確保の取り組みの進展などから、3年では135万6000頭（同0.3%増）と、前年並みとなった。

この結果、同年の1戸当たり飼養頭数は、98.3頭（同4.7%増）となった。

図1 乳用牛の飼養戸数および飼養頭数の推移



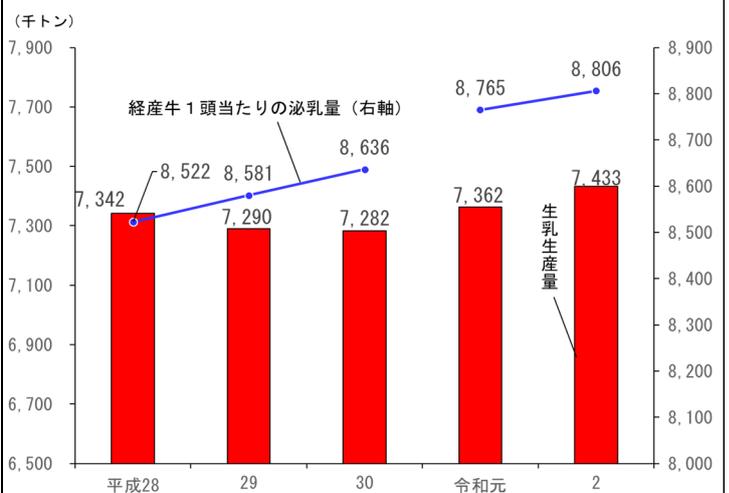
資料：農林水産省「畜産統計」  
 注1：各年2月1日現在。  
 注2：平成31年（旧）までは従来実施してきた飼養者を対象とした統計調査、平成31年（新）および令和2年以降は牛個体識別全国データベースなどの行政記録情報や関係統計により集計した加工統計であり、統計手法が異なる

## ◆生乳生産

### 2年度の生乳生産量、前年度比1.0%増

酪農家の離農が進む中、都府県においては泌乳量の増加以上に飼養頭数が減少したことで、生乳生産量は平成8年度の約870万トン进行ピークに、おおむね減少傾向で推移してきた。令和2年度の全国の生乳生産量は、飼養頭数や1頭当たりの泌乳量の増加などにより、743万3328トン（前年度比1.0%増）と2年連続で前年度をわずかに上回った（図2）。経産牛1頭当たりの泌乳量は微増傾向で推移しており、2年度は8806キログラム（同0.4%増）となった。

図2 生乳生産量・経産牛1頭当たりの泌乳量の推移（全国）



資料：農林水産省「畜産統計」、「牛乳乳製品統計」  
 注1：経産牛1頭当たりの泌乳量は、畜産統計および牛乳乳製品統計のデータを基に機構にて算出。  
 注2：畜産統計について、2020年から統計手法が変更されたため、経産牛1頭当たりの泌乳量については2020年度以降の数値は、2019年度までの数値と接続しない。

## ◆用途別生乳処理量

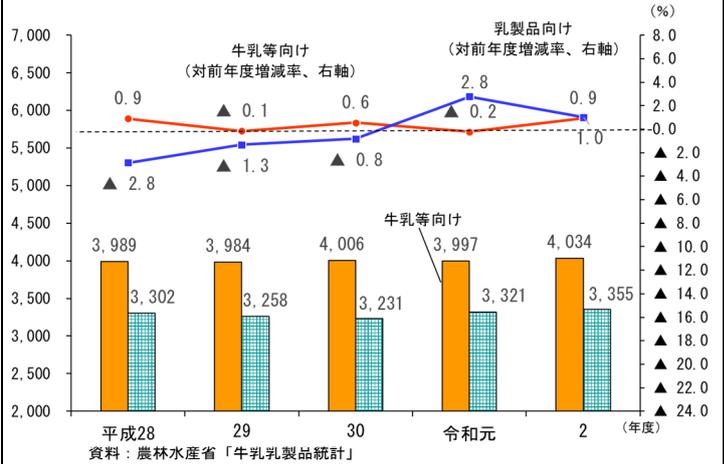
### 2年度の乳製品向け処理量、前年度比1.0%増

令和2年度の用途別生乳処理量を仕向け先別に見ると、牛乳等向けは403万4128トン(前年度比0.9%増)と前年度をわずかに上回った(図3)。上述の通り生乳生産量についても前年度に続き増加となる中、2年度の牛乳生産量に占める牛乳等向け処理量の割合を表す市乳化率は、前年度同様54.3%となった。

一方、乳製品向け処理量は335万4678トン(同1.0%増)となった。元年度末から新型コロナウイルス感染症(COVID-19)の影響が本格化し、生乳需給が緩和したことが要因の一つに挙げられる。具体的には、2年3月に小中学校の臨時休校措置が全国的に実施されたことを皮切りに、続く4~5月には1回目の緊急事態宣言が発令され、商業施設の休業が行われたことなどにより、学校給食用牛乳や業務用牛乳をはじめ牛乳・乳製品の需要が大きく減少した。その際、処理不可能乳

の発生を回避するため、長期保存可能な脱脂粉乳およびバターに仕向ける取り組みが行われたほか、農林水産省主導で、牛乳やヨーグルトを普段より1本多く消費することを推進するプラスワンプロジェクトが実施された。

図3 用途別生乳処理量の推移



## ◆乳製品向け処理量

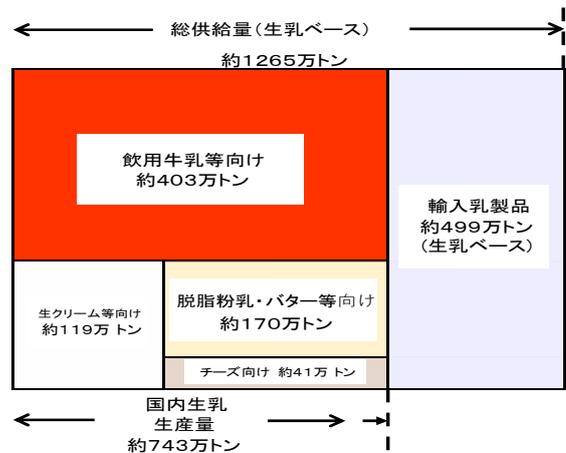
### 2年度の脱脂粉乳・バター等向け生乳処理量、6.9%増

令和2年度の生乳の需給構造を見ると、生乳生産は約743万トンと前年を上回った(図4)。このうち乳製品向け処理量を区分別に見ると、上述の通り、COVID-19の影響が色濃く表れている。脱脂粉乳・バター等向けは、約170万トン(前年度比6.9%増)とかなりの程度、チーズ向けは約41万トン(同2.5%増)とわずかに、それぞれ増加した。一方、液状乳製品の業務用需要が大幅に落ち込んだことで、生クリーム等向けは前年度からさらに6万トン減少し、約119万トン(同4.8%減)となった。

また、輸入乳製品(生乳ベース)は、お土産需要などの業務用需要が急落していることから国内在庫が高い水準にあり、約499万トンと減少に転じた。これにより、減少した品目があるものの、生乳需給の調整弁として脱脂粉乳・バターに多く仕向けられ処理不可

能乳の発生が回避された結果、2年度の総供給量は約1265万トンと前年度から約7万トン増加した。

図4 生乳の需給構造の概要(令和2年度)



資料：農林水産省「畜産をめぐる情勢」

注1：四捨五入の関係で、必ずしも計が文中の数字と一致しない。

注2：国内生乳生産量の中には、このほか、他の用途向け(約9万トン)の生乳がある。

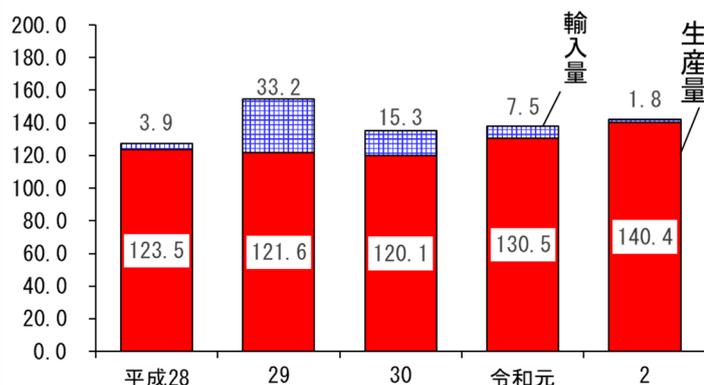
注3：生クリーム等向けは、生クリーム・脱脂濃縮乳・濃縮乳に仕向けられたものをいう。

## ◆ 脱脂粉乳

## 2年度の輸入量、前年度比76.5%減

脱脂粉乳の生産量は、平成28年度から連続して減少傾向にあったが、令和2年度はCOVID-19の影響による増産もあり、14万432トンと元年度に引き続き増加している。一方で、同年度の輸入量（機構輸入分のみ）は、高い在庫水準の下で1759トン（同76.5%減）と大幅に減少した（図5）。COVID-19以前の平成30年度と比較すると、脱脂粉乳の輸入量は1割程度にまで縮小している。

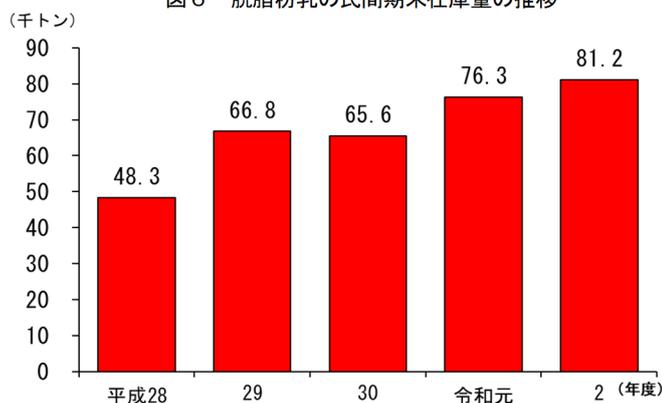
図5 脱脂粉乳の生産量・輸入量の推移



資料：農林水産省「牛乳乳製品統計」、(独)農畜産業振興機構調べ  
注：輸入量は機構輸入分のみ。

こうした中、2年度の推定出回り量は、13万7622トン（同7.7%増）とかなりの程度増加したものの、上記の増産などの影響もあり、2年度の民間期末在庫量は、8万0928トン（同6.0%増）と元年度をさらに上回る形となった（図6）。

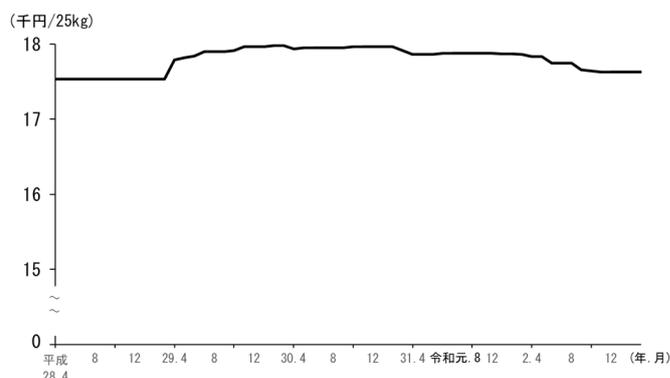
図6 脱脂粉乳の民間期末在庫量の推移



資料：農林水産省「牛乳乳製品統計」、(独)農畜産業振興機構調べ

脱脂粉乳の大口需要者価格は、平成26年度の消費税増税や乳価の引上げなどから上昇傾向となり、27年4月の乳価の引き上げなどから上昇したが、その後、おおむね横ばいで推移した。さらに、29年4月の乳価の引き上げ以降、30年度を通じて高い水準を維持したが、令和元年度に下落に転じ、令和2年度は25キログラム当たり平均1万7698円（同1.0%安）とわずかに下落した（図7）。

図7 脱脂粉乳の大口需要者価格の推移



資料：農林水産省「大口需要者向け価格の動向」  
注：消費税を含む。

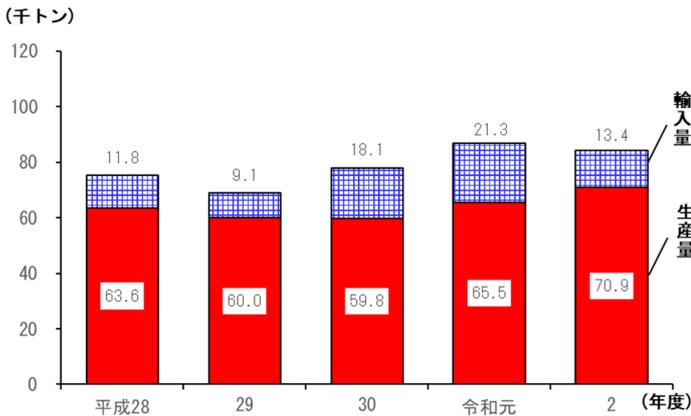
◆バター

2年度の期末在庫量、前年度比34.9%増

令和2年度のバターの生産量は、前述の通りCOVID-19の影響による増産もあり、7万944トン（前年度比8.3%増）と前年同月をかなりの程度上回った。一方、同年度の輸入量（機構輸入分のみ）は、1万3354トン（同37.2%減）と大幅に減少した（図8）。

バターの大口需要者価格は、脱脂粉乳と同様、平成26年度の消費増税や乳価の引き上げなどから上昇傾向となった。27年4月、29年4月にも再度乳価の引き上げなどから上昇してきたものの、令和元年度は下落に転じている。2年度は1キログラム当たり平均1407円（同1.6%安）とわずかに上昇した（図10）。

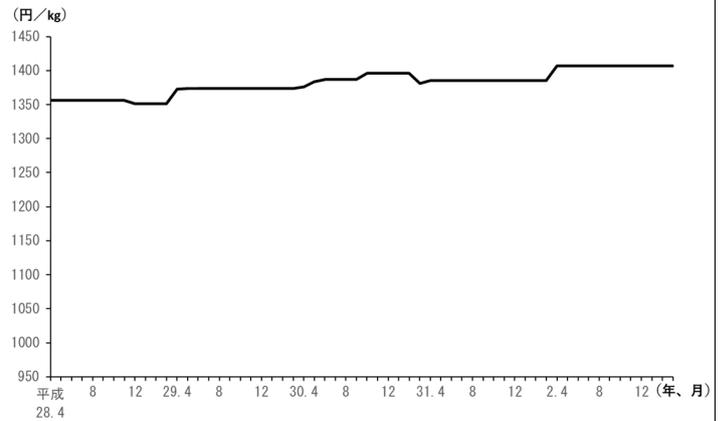
図8 バターの生産量・輸入量の推移



資料：農林水産省「牛乳乳製品統計」  
注：輸入量は機構輸入分のみ。

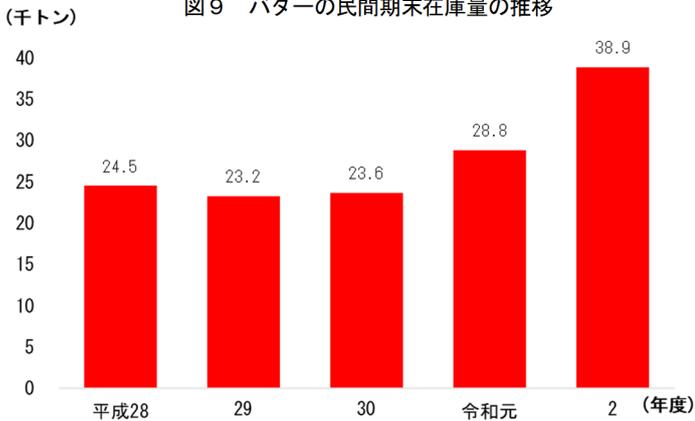
こうした中、同年度の推定出回り量は7万4748トン（同8.6%減）とかなりの程度減少したが、上記の増産などの影響もあり、同年度の民間期末在庫量は3万8862トン（同34.9%増）と大幅に増加した（図9）。

図10 バターの大口需要者価格の推移



資料：農林水産省「大口需要者向け価格の動向」  
注：消費税を含む。

図9 バターの民間期末在庫量の推移



資料：農林水産省「牛乳乳製品統計」、(独)農畜産業振興機構調べ

## ◆チーズ

### 2年度の総消費量、前年度比0.2%増

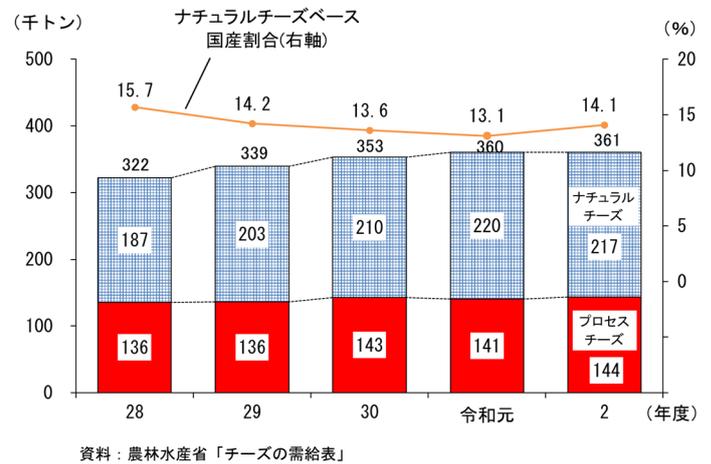
#### チーズの総消費量

チーズの総消費量は、家庭消費や外食需要の増加などを背景に、増加傾向で推移している。

令和2年度のナチュラルチーズ消費量は、国産ナチュラルチーズ生産量が増加し、輸入量が減少して、21万7219トン（前年度比1.1%減）となった。一方、プロセスチーズ消費量は、14万3525トン（同2.1%増）となった。

この結果、ナチュラルチーズとプロセスチーズを合わせた総消費量は36万744トン（同0.2%増）と前年並みとなった（図11）。

図11 チーズの総消費量と国産割合の推移

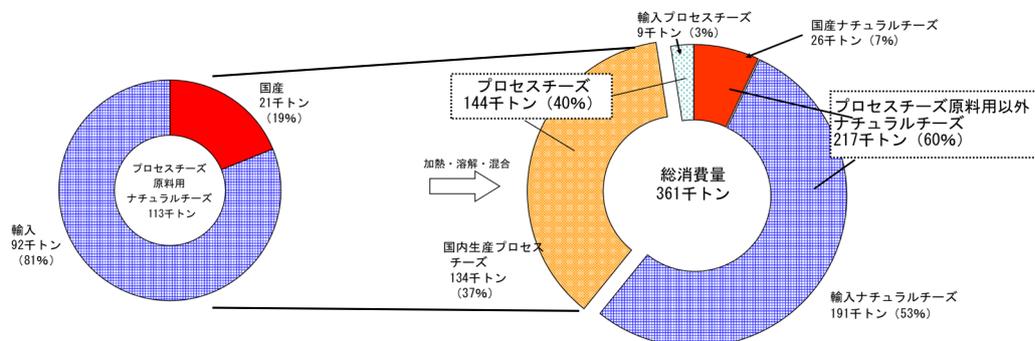


#### チーズ総消費量の内訳

令和2年度のチーズ総消費量に占める国産チーズの割合は、国内生産量が増加した一方、輸入が減少したことから14.1%（ナチュラルチーズベースに換算した場合の自給率）となり、前年度より1.0ポイント上昇した。

うち、プロセスチーズ原料用以外のナチュラルチーズについては、国産の伸びが輸入を上回ったため、国産の割合は12.1%と前年度より0.7ポイント上昇した。また、プロセスチーズ原料用のナチュラルチーズに占める国産の割合も、18.9%と前年度より1.5ポイント上昇した（図12）。

図12 令和2年度のチーズ総消費量の内訳



資料：農林水産省「チーズの需給表」

注1：プロセスチーズ原料用以外とは、直接消費用、業務用、その他原料用として使用されたもの。

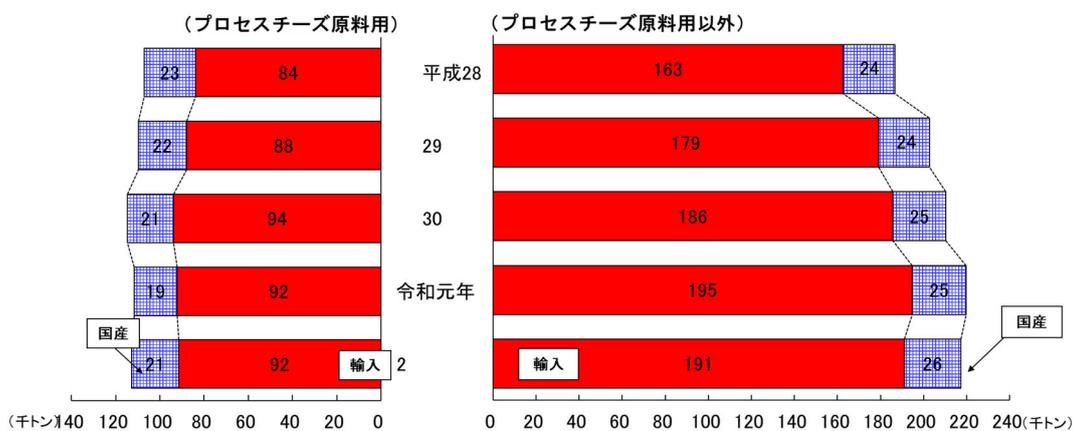
注2：四捨五入の関係で、必ずしも合計値が文中の数字と一致しない。

## チーズの生産量・輸入量

令和2年度のナチュラルチーズの輸入量(プロセスチーズ原料用+プロセスチーズ原料用以外)は、28万2494トン(前年度比1.5%減)とわずかに減少した。内訳を見ると、プロセスチーズ原料用は9万1532トン(同0.2%減)、プロセスチーズ原料用以外は19万962トン(同1.9%減)と、いずれもわずかに減少した(図13)。

国産ナチュラルチーズの生産量(プロセスチーズ原料用+プロセスチーズ原料用以外)は、4万7564トン(同7.1%増)とかなりの程度増加した。内訳を見ると、プロセスチーズ原料用が2万1307トン(同9.8%増)とかなりの程度、プロセスチーズ原料用以外が2万6257トン(同5.0%増)とやや増加した。

図13 ナチュラルチーズの生産量・輸入量の推移



資料：農林水産省「チーズの需給表」  
注：プロセスチーズ原料用以外とは、直接消費用、業務用、その他原料用として使用された量。

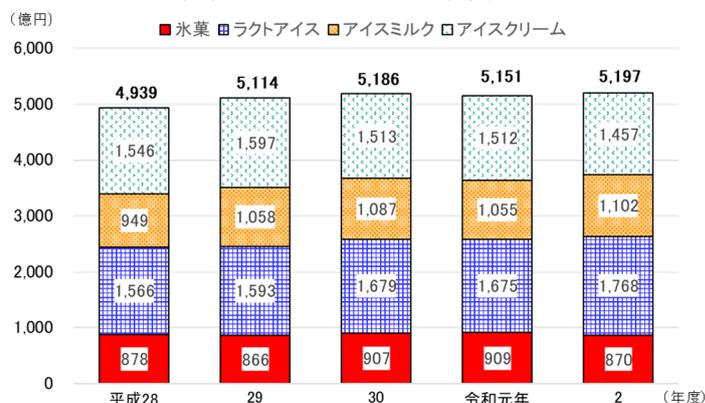
## ◆アイスクリーム

### 2年度の国産生産量および輸入量減少も販売価格は堅調

令和2年度のアイスクリームの市場規模は、販売金額が、5197億円(前年度比0.9%増)となり、わずかに前年度を上回った(図14)。

需給動向を見ると、令和2年度の国産アイスクリーム生産量は、12万9936キロリットル(同10.5%減)とかなりの程度減少した。輸入量は、5089トン(同5.9%減)と減少した。

図14 種類別アイスクリームの市場規模の推移



資料：一般社団法人 日本アイスクリーム協会  
「2019年度 アイスクリーム類及び氷菓 販売実績」  
農林水産省「牛乳乳製品統計」、財務省「貿易統計」